

児童生徒の「学びを豊かにする」リズム系ダンスのカリキュラムデザイン開発

柿手 祝彦 ・ 酒井 祐太* ・ 栗原 良典* ・ 黒坂 志穂**

1. 背景

(1) 体育科・保健体育科の現状

今日、グローバル化、情報化、少子・高齢化が急速に進展する中、社会構造の変化に伴い私たちのライフスタイルも変化していくことが予想される。子どもたち（児童・生徒）が大人になったときのライフスタイルを鑑みたとき、運動・スポーツへのかかわり方も多様化していくであろう。また、幸福な生活を営むために、文化としての運動・スポーツをより主体的に享受する重要性は高まっていくと予想できる。このような情勢の中、これまで以上に生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことが学校体育に求められ、体育科・保健体育科の授業が果たす役割は大きなウエイトを担うであろう。つまり、授業を通して体を動かし、スポーツに親しむこと、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、爽快感・達成感など精神的な充足を図ること、課題に主体的に取り組むこと、他者とのかかわりを深め、コミュニケーション能力を育成すること等、豊かなスポーツライフの基礎となる資質・能力を育成することが肝要である。加えて、授業で学んだことと生活とのかかわりが意識されたり、実生活に活用されたりして、運動・スポーツの価値をより広く、深く認識されるような授業が一層求められていくと考えられる。

(2) 体育科・保健体育科の授業とは

上述にある通り、時代の変遷にともなって求められる資質や能力は変化していくものである。平成29年7月に改訂された中学校学習指導要領解説保健体育編では、それらの資質・能力が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」という3つの視点で整理されている。しかしながら、体育科・保健体育科の授業において、「運動やスポーツに基づく明確な学習課題」が提示され、その達成に向け練習を積み重ね、達成度を振り返る、という授業の構造は変わらないものではないのだろうか。体育科・保健体育科の授業とは“運動やスポーツの課題”に取り組む中で、様々な資質や能力を身につけることができる教科であると捉えている。そして、どのような学習課題を設定し、どのようにそれを解決させていくのか、その過程でいかに資質・能力を育てていくのか、ここに授業者としての工夫が求められるものと考えている。

(3) 体育科・保健体育科の学びの豊かさとは

広島大学附属東雲小学校・中学校（以降、本校とする）では、2015年度より、「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」を研究テーマと設定して実践研究を始めた。本研究における「グローバル時代をきりひらく資質・能力」とは「主体性（自律的な活動・チャレンジ精神）」「多様性（さまざまな文化に対する受容）」「協働性（コラボレーション）」の3つである。体育科・保健体育科において「主体性」は、運動を楽しむ姿、課題に向かって進んで取り組む姿、「多様性」は、他者の意見や考えを受容し、違いを認める姿、「協働性」は他者との対話や意見交換を通して課題解決に向かう姿ととらえることにした。また、主体性・多様性・協働性を発揮しながら学習課題の解決に向け取り組んでいる様子を学びの豊かさとして定義することとした。

* 広島大学附属東雲小学校

** 広島大学大学院人間社会科学研究科

柿手祝彦・酒井祐太・栗原良典・黒坂志穂(2020),「児童生徒の「学びを豊かにする」リズム系ダンスのカリキュラムデザイン開発」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第50集」, 17-22.

昨年度は, 「学びを豊かにする小中9年間のリズム系ダンスのカリキュラムデザインを開発」という目的のもと, 研究を行った。リズム系ダンスにおける学びを豊かにする手立てとして, ①到達目標の明確化, ②必然性のある課題設定, ③ICTの活用などを中心に, 改善に取り組んだ。その結果は, 表1の通りである。

表1. 昨年度の成果と課題 (○成果, ●課題)

(1) 小学1年生

○動物や身の回りのものになりきってダンスをする「なりきりダンス」の活動を設定することによって, 多様な動きが生まれた。発達段階として, 低学年だからこそ, 様々なものになりきって表現できるよさがあると感じた。表現の広がりとして, 「動きの大きさ」「空間の使い方」「体の使い方」「動きのスピード」の4つの観点が見られた。

●教師がリズムに乗っていないと評価している児童であっても, 児童の自己評価では, リズムに乗れていると判断している。今後は, 教師と児童の評価が一致するように検討する必要がある。

(2) 複式高学年

○遊びや簡単な表現遊びなどの体ほぐし運動は, 導入部分で緊張感を和らげることができた。また, ソロとチームの踊りを取り入れることで, 一人ひとりの表現の幅が広がった。また, 空間・時間・力という視点を与えることで, オリジナリティーのある表現が表出された。

●ダンス交流会の構成では, 児童の緊張をほぐす意味でも前半にチームで踊り, 後半で一人ひとり踊る構成にしてもよかったのではないかと感じた。

(3) 中学2年生

○表現の目的を集団で共有し, 表現の方法に選択の幅を持たせたことで, 多様な動きを生み出すことができた。それによって, 表現の幅が広がり, 特にフォーメーションにおいて顕著であった。

○表現方法の選択肢をiPadで提示することで, 複数のグループの要望に応えることができた。

●振り付けの質(動きの強弱や感情表現)を向上させるための効果的な指導方法の検討が必要である。

(4) リズム系ダンスについて

本研究では, リズム系ダンスを取り扱う。リズム系ダンスとは, 小学校のリズムダンスと中学校の現代的なリズムのダンスをひとまとめにして表現した概念であり, これらは日本や世界の様々な音楽や踊りに触れるグローバルな視点や他の教科で学んだ知識を身体表現としてより深められる等, 「主体的・対話的で深い学び」に大きな役割を果たすと報告されている(木宮ら, 2017)。

このリズム系ダンスの分野では, 以前から「主体的・対話的で深い学び」につながるような実践が多く行われてきた。例えば, 小学5年生を対象にダウンのリズムという技能習得に重点をおいた実践(小林, 2008)や, 小学1年生を対象に踊ることへの抵抗感の解消に関する実践(湯浅, 2016), 中学2年生を対象に自主的創造的なダンス学習に主眼を置いた実践(君和田, 2016), そして, 学校ダンス・ダンス教育に関する内容の豊かさは他に類をみない(松尾, 2013)と評される『女子体育』という雑誌では, 2016年8・9月号において「アクティブ・ラーニングによる表現・ダンス指導事例集」を特集している。その特集内において, 細川(2016)は「自主創造的な学習を目指してきた日本のダンス教育は, 既に長年に渡って『アクティブ・ラーニング』の趣旨に合った指導法を検討, 実践してきた」と述べている。

(5) リズム系ダンスの系統性について

一方, このリズム系ダンスに共通する課題として片渕(2017)は, 主体的対話的学習(アクティブ・ラーニング)へ向けて「どのようなコミュニケーションやワークによってどのような身体的な体験

柿手祝彦・酒井祐太・栗原良典・黒坂志穂(2020),「児童生徒の「学びを豊かにする」リズム系ダンスのカリキュラムデザイン開発」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第50集」, 17-22.

が生み出されるのか, どのような過程を経て動きの創作が登場するのか, そこに他者はどのように介在する可能性があるのか, このような検討が求められる」と述べ, 今後求められる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」という3つの資質・能力を量的なデータだけでなく質的なデータにも基づいて検証を行い, 実践の蓄積を行っていくことが重要であると指摘している。また, 片渕(2017)は, リズム系ダンスでは「ICTの活用により主体的・対話的学習(アクティブ・ラーニング)を促進するような授業研究」の蓄積も今後の課題として指摘している。また, 現在, カリキュラムマネジメントの視点に立った教育課程編成の重要性が求められているものの, リズム系ダンスにおいては, 小中9年間を見通したカリキュラムの効果を検証した実践は管見の限り見当たらない。

したがって, 本研究において, 小中9年間の学びを想定したリズム系ダンスのカリキュラムデザインを開発し, 量・質の両面から効果の検証を行い, その成果を全国に発信していくことは, 学びを豊かにする授業づくりのあり方に寄与するだけでなく, 社会的意義も大きいと考えられる。

2. 目的

本研究では, 児童生徒の「学びを豊かにする」リズム系ダンスのカリキュラムデザインを開発する。

3. 方法

(1) カリキュラムデザイン試案について

本研究では高田(2017)のヒップホップダンスの活動形態に関する仮説分類を参考に, カリキュラムデザインの試案を作成した。その概要を表2に示す。

表2. リズム系ダンスのカリキュラムデザイン試案(概要)

学年	学習内容	形態	楽しさ・特性
小1-2	動物や身の回りのもの等になりきる「なりきりダンス」で, 多様な動きでリズムにのって踊る	1人 BGM	様々な曲調に応じて, リズムを感じる楽しさを味わう。
小3-4	基本的な振付を習得して組み合わせ, 「コンビダンス」で他者と動きをあわせる・ずらす, 関わり合って踊る	2人 数フレーズ	「振付をつかい, 踊る」ことに楽しさを見出す。
小5-6	動きのバリエーションを増やし, 「グループダンス」で動きに変化をつけたり, 空間の使い方を工夫したりして踊る	小グループ 数フレーズ	「チームで踊る」ことに楽しさを味わう。
中1-2	より多い人数・広い空間で, 選んだ曲の特徴を捉えて, 変化とまとまりをつけて踊る	チーム	「仲間と作品を創る」ことへの楽しさを感じる。
中3	既習の動きから自分なりにアレンジし, 関わり合う中で動きの質を高めて踊る	短い曲	

この試案を基に, 小・中で授業実践を行い, カリキュラムデザインの有効性を検証する。

(2) 検証方法について

- 1) 知識・技能の測定
 - ・リズム系ダンス知識テストの単元前後の統計分析
 - ・毎時間の自己評価(学習指導要領原文に基づく評価基準)
 - ・実技テスト(VTR録画の分析)の単元前後の統計分析
- 2) 思考力・判断力・表現力等の測定
 - ・毎時間の自己評価・自由記述(学習指導要領原文に基づく評価基準)
 - ・腕時計式ボイスレコーダーによる授業中の生徒の会話記録分析
- 3) 学びに向かう力・人間性等の測定
 - ・リズム系ダンスの愛好度調査の単元前後の統計分析
 - ・毎時間の自己評価・自由記述(学習指導要領原文に基づく評価基準)
- 4) 抽出児童・生徒に対するインタビュー調査

- ・単元前に実施する愛好度調査の結果が著しく低い生徒を抽出対象児童・生徒とする。その児童・生徒の愛好度の変化に着目し、今回の授業実践におけるデータを縦断的に蓄積し、「体育的学力」格差に対する解決策という視点からもカリキュラムデザインの検証を行う。

5) 授業実践の映像記録分析

4. 授業実践

(1) 単元の解釈

ダンスの最も根源的な面白さの中核は、人間の身体でないものを人間の身体で表現することにある。また、ダンスは、対象（現象や感情、思想など）の身体による「模倣」と言い換えられることもある。「模倣」とは、人間の身体でないものの模倣であるため、その解釈は「写し」ではなく「移し」であるともいえる。この身体の感じ取りを媒介にした積極的・能動的な「移し」は、極めて創造的な活動である。

現代的なリズムのダンスは、リズムの特徴をとらえ自由に動きを創造する学習である。その中の一つであるヒップホップダンスは、アフリカ系やヒスパニック系の低所得者層の若者たちによる自己表現として発展した歴史を持つ。人の真似を嫌い、オリジナリティを大切にしている。このように、動きを創造し、良し悪しを判断して選びまとめ、自己表現する現代的なリズムのダンスは、まさに、主体的な学びであるといえる。

本学級の生徒は、昨年度に4人組での作品作りを目標とした現代的なリズムのダンスの単元を学習している。その学習をふまえたアンケート調査では、「ダンスはみんなで協力しなきゃできなくて、だから教えたり、教えられたりすることができてみんなの仲も深まるのでそれがいいと思います」「ダンスはみんなが協力しないと合わすことができないから、ダンスを通してみんなの団結力とか絆が深まる」「私はダンスをするのが1年生の時から、たのしみだったので、まあ本気でしたいと思っている状況、どうせするなら本気でしたいと思います。本気でダンスをすることで得られる絆があると思います」など肯定的な印象を持っている生徒が多く見受けられた。一方で、「私はダンスが好きではありません。リズム感がないからです。それに動きがとても難しいです。1年生のときに、全然振り付けが決められなくて、ぐちゃぐちゃになってしまいました。だから、ダンスが好きではありません」「大勢の人の前で踊るのが恥ずかしいし、ダンスも下手だし、僕は体育でソフトボールを取り入れてもらう方がいい」と否定的な印象を持つ生徒も見受けられた。

指導にあたっては、「どうすれば、全員がダンスを好きになり、自分らしく踊ることができるようになるのか」この問いを単元全体の学習課題として設定し、毎時間、その内容を具体化していくよう単元デザインを構成した。この課題の達成を目指す中で、豊かに学ぶ生徒の姿を引き出すことができると考えている。また、学習環境の整備を行う。本単元では、生徒一人一人が自分や仲間の実態に応じて学習方法を選択できるよう、移動式ミラー、プロジェクター、iPad等を用意した。それぞれの学習の方法や効果を指導し、目的をもって学習方法を選択できるようにしたい。

(2) 単元目標

1. 全員がダンスの楽しさを味わえるようにするためにはどうすればよいのかを追求できる。
2. 音楽のリズムに合わせて、自分らしさを身体で表現できるようにする。

(3) 単元計画

- | | |
|--------------------|------|
| 1. オリエンテーション | 1 時間 |
| 2. 基本技能（ステップなど）の学習 | 2 時間 |
| 3. 規定曲で基本技能を崩す学習 | 5 時間 |
| 4. 自分らしさを表現する学習 | 5 時間 |

(4) 本時案 (自分らしさを表現する学習)

学 習 活 動 と 内 容	指 導 上 の 留 意 点 (◆ 評 価)
<input type="checkbox"/> 基本技能を活用したウォーミングアップを行う。 ・アイソレーション・アップ・ダウン ・基本ステップ 8 個	<input type="checkbox"/> ウォーミングアップの目的を意識して実施しているかを観察し、意識が低いようであれば、集合させ目的の再確認を行う。
<input type="checkbox"/> 学習課題の確認をする。	<input type="checkbox"/> 学習課題と、課題達成に向けて何をすべきなのかを説明する。
グループで設定したテーマを伝えることができる作品をつくることができる。	
<input type="checkbox"/> 課題達成に向けた学習を行う。	<input type="checkbox"/> 課題に意識が向いていない生徒がいた場合には、他の生徒が、その生徒を学習活動に戻すように促す。 <input type="checkbox"/> 残り時間の伝達や課題の達成状況の確認を助言し、課題解決に向けての意識を高める。 ◆ 全員が学習課題を達成できるように、工夫した行動ができたか【思考・判断】。
<input type="checkbox"/> 振り返りをする。 ・ 全員達成できたかどうかを確認する。 ・ 課題を達成できた人の工夫点を共有する。	<input type="checkbox"/> 全員が学習課題を達成できるように工夫している行動例を上げ、評価する。 <input type="checkbox"/> 生徒に課題を達成するために工夫したことを発言させる。 ◆ グループで設定したテーマを伝えることができる作品をつくることができる。【技能】。

5. 結果及び考察

本授業における技能では、A：モデル映像に創造的な動きを加えることができる、B：モデル映像通りの動きができる、C：モデル映像通りの動きができないという3段階の評価基準を設定した。その結果、16グループ中、A評価は3グループ、B評価は11グループ、C評価は2グループという結果となった。

A評価となったグループの特徴としては、グループ内にダンス経験者及びダンスに対する愛好度が高い生徒が存在していた。その生徒は、授業実施前から自宅で振り付けの練習や5人グループのフォーメーションの提案事項をまとめており、単元開始時から、その生徒を中心にグループでの学習が進む様子が見られた。また、他の生徒も、その子のやる気に後押しされ、ダンスに意欲的に取り組む様子が見られた。また、単元終盤では、他の生徒も自宅での練習を進め、新しい振り付けやフォーメーションを準備して、授業に参加する様子が見られた。A評価になったグループでは、授業が授業外での積極的な取り組みを後押しする仕組みが存在した。

B評価となったグループの特徴としては、Aグループのようにダンス経験者やダンスに対する愛好度が高い生徒が存在するグループもあった。しかしながら、授業外での取り組み、あるいは、他のメンバーを巻き込んで上達を目指そうとする姿勢には、大きな差が見られた。授業中の取り組みでは、映像から動きを解釈するコツをつかむまでに、少し時間がかかり、ICT機器上での動画編集作業に時間を使う場面も見られたため、練習量に差が見られた。

C評価となったグループの特徴としては、グループ内での人間関係にトラブルを抱えている様子が見られた。モデルとする映像を選択する初期段階から、意見をすり合わせる事が難しく、ぶつかる

柿手祝彦・酒井祐太・栗原良典・黒坂志穂(2020),「児童生徒の「学びを豊かにする」リズム系ダンスのカリキュラムデザイン開発」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 50 集」, 17-22.

場面がみられた。また、練習場面では、教員からの促しをきっかけに練習を開始する場面が多く、自分が修得した動き方を、他のメンバーに広げようとする場面も少ない様子であった。

6. 引用・参考文献

文部科学省, 『中学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 保健体育編』, 東山書房, 2017.

文部科学省, 『小学校学習指導要領解説(平成 29 年告示) 体育編』, 東洋館出版社, 2017.

文部科学省, 『スポーツ基本法 平成 23 年法律第 78 号 条文』, 2011.

国立教育政策研究所, 『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』, 2013.

日本教科教育学会, 『今なぜ、教科教育なのかー教科の本質を踏まえた授業づくり』, 文溪堂, 2015.

中央教育審議会, 『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』, 2014.

グリフィン, マクゴー, ケア, 『21 世紀型スキルー学びと評価の新たな形ー』, 北大路書房, 2014.

田村学, 『授業を磨く』, 東洋館出版, 2015.

中央教育審議会, 『次期学習指導要領にむけたこれまでの審議のまとめ(素案)のポイント』, 2016.

国立教育政策研究所, 『国研ライブラリー 資質・能力(理論編)』, 東洋館出版社, 2016.

三宅芳雄, 三宅なほみ, 『新訂 教育心理学概論』, 放送大学教育振興会, 2014.

杉原隆, 『運動指導の心理学』, 大修館書店, 2008.

高田康史, 「リズム系ダンスの活動形態による 3 つの分類についての提案ー踊り手と観客の様相による活動形態」, 体育科教育, 2017 年 10 月号, 70-72, 2017.

小林治雄, 「リズムと表現を楽しむヒップホップの授業」, 体育科教育, 2008 年 3 月号, 40-43, 2008.

湯浅理枝, 「学習内容を明確にした表現リズム遊びの指導ダンス ♪ダンス☆ダンス! の実践を通して」, 体育科教育, 2016 年 3 月号, 56-59, 2016.

君和田雅子, 「ヒップホップだけじゃない!! もう 1 つの現代的なリズムのダンス」, 体育科教育, 2016 年 3 月号, 48-51, 2016.

松尾千秋, 高田康史, 車春紅他, 『『女子体育』誌にみるリズム・現代的なリズムのダンスに関する記述の動向と今後の課題』, 広島体育学研究, 39 号, 14, 2013.

細川江利子, 「アクティブ・ラーニングを先導するダンス指導」, 女子体育, 2016 年 8 月号, 4, 2016.

細川江利子, 「アクティブ・ラーニングを先導するダンス指導」, 女子体育, 2016 年 9 月号, 43, 2016.

片渕美穂子, 「表現運動・ダンス関連記事の動向から見えるダンス授業研究の課題ー月刊誌『体育科教育』(平成 19~28 年度)を中心にしてー」, 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学 68(1), 175-181, 2018.

村田芳子, 「表現運動・リズムダンスの最新指導法」, 小学館, 2012.

石井英真, 「小学校発アクティブ・ラーニングを超える授業一質の高い学びのヴィジョン「教化する」授業一」, 日本標準, 10-20, 2017.